

## 在日ブラジル人コミュニティの「継承ポルトガル語教育」 小貫 大輔(東海大学教授)

「バイリンガル・マルチリンガル子どもネット」という団体があって、私も「アドバイザー」の一人として仲間に入れてもらっています。日本と海外で「日本語を含む複数の言語に囲まれて育つ子どもたち」を支援する団体です。一昨年から三年続けてオンラインの国際フォーラムを開催していて、今年のフォーラムでは、日本在住のブラジル人たちがやっている「継承語(親から子どもに伝える言語)」としてのポルトガル語教育の活動が紹介されました。そのご報告をさせていただきます。

この会のメンバーは世界中に散らばっていて、海外での公教育や民間での取り組みについてお話を聞くことができ、とつても勉強になります。昨年からの国際フォーラムでは、北米やオーストラリア、北欧をはじめとするヨーロッパ諸国やアジアの国々での継承日本語教育と、日本でのホスト国言語(現地語)としての日本語教育の現状を知ることができました。私にとって印象的だったのが、多文化主義を掲げるカナダやオーストラリア、そして複言語主義を掲げるヨーロッパ、特に北欧諸国からの報告でした。海外の日本人はその国にしてみれば「外国人」な訳ですが、その子どもたちがしっかりと親の言語を継承するための教育が、公共政策の枠組みで積極的に支援されている様に感動しました。

他方日本では、ホスト国言語としての日本語の教育すら十分におこなわれていません。ましてや、その子どもたちへの母語・継承語教育は、まったくの自助努力でしかされていないのが現状です。そんな中、日本に住むブラジル人たちは、お互いに協力しあって子どもたちにポルトガル語を伝える活動を続けています。今年の国際フォーラムでは、そんな活動の様子を在名古屋ブラジル領事館のエリーザ・マイアさんと、大阪でポルトガル語図書館を開いているルジア田中さんから紹介していただくことになりました。

### 継承ポルトガル語オリンピック

ブラジルの外務省は、今年、世界各地の在外公館を通じて「継承ポルトガル語オリンピック」というイベントを開催しました。日本では、ブラジル大使館と総領事館の主催で、各地のブラジル人教育者たちが協力して開催されました。「バイリンガル・マルチリンガル子どもネット」の国際フォーラムでは、そのイベントの背景や目的、方法や成果について報告いただきました。

オリンピックに参加した子どもたちは合計で79人。参加者は、最初にポルトガル語でスピーチした動画を送り、第二ステージでは、マルチプルチョイス(多肢選択式)のポルトガル語クイズに答えて二つの年齢カテゴリー別(9~12歳と13~15歳)に点数を競いました。それらの得点に応じて、名古屋、浜松、東京の三つの総領事館の管区ごとに上位三位までの入賞者を決めました。18人の入賞者は、さらに全国レベルの作文コンテストに進んで競い合いました。各年齢カテゴリーで全国レベルの三位までに入った六人の子どもたちには、マウリシオ・デ・ソウザという、「モニカ」というキャラクターのシリーズで有名な漫画家から賞品が送られました。

日本にはたくさんのブラジル人が住んでおり、子どもたちへのポルトガル語教育も活発です。継承語オリンピックも、民間ボランティア団体の教育者たちからの協力をえて実施されました。オリンピックということで競争的な側面が強調されないように、参加者全員がハッピーになるような仕組みが工夫されたのも、それら協力者が強く主張したからのことでした。協力者たちは、オリンピック参加前の子どもたちにポルトガル語の授業を実施したり、スピーチ動画のためのコーチングをしたりもしました。

私の大学(東海大学)は、2009年から2013年にかけて在日ブラジル人教育者のためのオンライン教員養成講座の実施に協力しましたが、そのときの卒業生205人のうち3人が、このオリンピックでも中心的な立場で関わりました。国際フォーラムで発表してくれたルジアさんも、そんな卒業生の一人です。

### 「パルレンダ」の絵本プロジェクト:歌とリズムで体を使って遊ぶ、親と子のポルトガル語遊び

在名古屋総領事館のエリーザ・マイアさんは、山家ヤスエさんというブラジル人(「プロジェクト・ベリンギ」代表)が私たちCRI(<https://cribrasil.org/about-us/>)と協力して進めている「パルレンダ」の絵本づくりの活動も紹介してくれました。「パルレンダ」とは、日本で言ったらズイズイズッコロバシのような、歌とリズムで手遊びや体遊びをするための一種の童謡のことを言います。

日本に住むブラジル人たちは、長時間の厳しい工場労働につくことが多い中、なかなか子どもたちに母国の言語を伝えることができなくなってしまう傾向があります。子どもは保育園などで長い時間を過ごすうちに親の言葉が話せなくなり、やがては親子で十分なコミュニケーションが取れなくなってしまうこともあります。そういう子どもたちは、日本語が上手になって不自由がないように見えますが、実は生活に必要なレベルの日本語にしか触れていないことがあり、高度な言語能力がなかなか育たないという問題が頻繁に起きているのです。

ブラジル人の親たちが子どもに与えることのできる最高の言語体験は、やはり母語のポルトガル語を通じての体験です。そんな親子のコミュニケーションを支えるための活動をしているのが、ヤスエさんたちの「プロジェクト・ビリンギ(バイリンガル・プロジェクト)」というグループの活動です。そのための一つのツールとして開発中なのが、この「パルレンダ」の絵本なのです。

私たち CRI は、ヤスエさんのプロジェクトに協力してカンピーナスのシュタイナー学校のエリーザ・マンサノ先生の「パルレンダ」教室をオンラインで開催したことがあります。そのときの出会いがきっかけとなって、今、エリーザ先生と一緒に絵本を作っているところです。もしかしたら総領事館の予算がついて、在日ブラジル人が出生届を出しに来るときに無料で配れるようになるかもしれないのですが、現在はひとまず独自予算での出版を目指しているところです。

著者のエリーザ・マンサノさんは、ブラジルのシュタイナー学校の先生です。彼女が集めてきた様々なパルレンダに、彼女の学校の卒業生でアーティストを目指している女性の挿絵できれいな絵本が完成しつつあります。この記事を読んでいただいている方も、ぜひプロジェクトに協力して絵本を購入していただけたらありがたいです。

### 官民で協力して子どもたちを支えよう

名古屋総領事館のコミュニティ担当エリーザ・マイアさんは、これらのプロジェクトについて説明した後、こうやって政府とコミュニティが協働でプロジェクトを実施することの意義を語って締めくくりました。「コミュニティのことはコミュニティの人たちが一番わかっているから」というエリーザさんの言葉は、まさにその通りだと思います。私たち CRI のメンバーたちも、ブラジルのファヴェーラのコミュニティ協会「モンチアズール」(<https://cribrasil.org/brazil/montezul/>)を通じて、コミュニティの当事者が集まって力を合わせることの底力を散々体験してきました。

ブラジルでは、20 世紀の終盤から政府が市民社会組織に公共サービスを委託することが多くなりました。カルドーズ大統領(任期:1995-2003)が「社会自由主義」と呼んだ考え方です。モンチアズールもサンパウロ市の政府に委託されて、近隣 30 万人の公衆衛生活動を担っています。他方、日本では、政府が教育政策をがっちり抱え込んでコントロールしようとするところがあります。北欧社会のように、そのスタイルでしっかりと移民の子どもたちへの教育が提供できるならいいのですが、とてもそんなことにはなりそうにありません。

ブラジルの政府にとって、日本に住むブラジル人の子どもたちのことはなかなか理解できないテーマです。だからこそ、領事館は当事者のコミュニティに協働を呼びかけるのです。同じように日本の政府にとっても、海外につながる子どもたちの教育のニーズはなかなか理解できないことでしょう。「当事者のことは当事者に聞け」の精神で、大胆に外国人コミュニティと手を結んで実効性のある取り組みを作っていけたらいいのにな、と思うのです。「バイリンガル・マルチリンガル子どもネット」の国際フォーラムを見ていると、諸外国で日本人コミュニティがホスト社会と協働して日本語と現地語のバイリンガルを育てている様子が伝わってきます。日本もそんな社会となるように、私たち CRI としては、これからもブラジル人コミュニティの声を拾い上げて発信していけたらと思います。

コラム

### 「バイリンガル・マルチリンガル子どもネット」へのお誘い

「バイリンガル・マルチリンガル子どもネット」は会員を募集しています。会員になると、記事の中で触れた国際フォーラムの録画(世界各地の継承語教育に関する動画アーカイブ)もすべて視聴することができます。年会費は個人会員 A で 3,000 円、個人会員 B だとなんと無料(!)です。ホームページは会の名前で検索するか、以下のリンクからお入りください。

<https://www.bmcn-net.com/>